

基礎看護学実習Ⅱの目標に対する学生の自己評価
－ 1期生の臨地実習評価の考察－

内田史江，田村美子，西岡美作子，荒井葉子，清水暁美，橋本和子

福山平成大学看護学部看護学科 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸 117-1

**The second part of basic nursing practiceⅡ training objective e
is for the student to evaluation them selves.**

－A study of the first students, self-evaluation of their practical training－

Fumie UCHIDA, Yoshiko TAMURA, Misako NISHIOKA
Yoko ARAI, Akemi SHIMIZU, Kazuko HASHIMOTO

Faculty of Nursing, Fukuyama Heisei University ,117-1 Shoto, kamiwanari, Miyuki, Fukuyama-city,
Hiroshima(〒720-0001)Japan.

要約

本研究の目的は，1期生2年次生の基礎看護学実習Ⅱに対する学生の自己評価から，今後の実習指導に対する方向性を得ることである。基礎看護学実習Ⅱ終了後に，学生による自己評価を行った。その結果，学生は，初めて患者を受け持ち，看護を実践するなかで，対象とのよい人間関係を築こうとしていたが，健康障害の理解不足や対象を総合的に理解することは難しいと認識していた。対象を総合的に理解できるように，病態生理やアセスメント能力を育むための教授方法を検討していくことが今後の課題であることが示唆された。

キーワード：基礎看護学実習Ⅱ，自己評価，看護学生

Abstract

The purpose of this study is to get directionality for the future training guidance from the self evaluation of the first class, 2nd year basic nursing practiceⅡ training students. The self evaluations performed by the student after the 2nd part of basic nursing practiceⅡ training.

As a result, the students took charge of a patient for the first time, While they practiced nursing and building good relation with the patients. They recognized it was difficult to understand patients generally. Also they face the lack of understanding health problems. The future task is to examine the method of teaching. So as to develop patients pathophysiology and the ability for assessment. Also be able to understand a patient generally.

Key Word: Basic Nursing PracticeⅡ, Self Evaluation, Nursing Student

I. 緒言

看護教育における臨地実習は、学内で習得した知識、技術、態度を実践の場面で適用し看護実践する場であり、また、対象者との関わりを通して、学生の人間的成長が促されるうえでも重要である。基礎看護学実習は、看護の対象である人間と直接的にかかわり、基本的ニーズへの援助を通して看護の必要性を理解し、各看護学に応用する能力を養う学習である¹⁾とされている。

A 大学は、看護学部看護学科が新設されて 2 年目である。1 年次の 3 月に医療を受ける患者およびその家族に接し、健康障害を持った対照の入院生活と必要なケアについて学ぶこと、看護職者やそのほかの医療専門職者と接し、保健医療におけるチームサービスと看護の社会的役割や看護職者としての態度を学ぶ目的のために基礎看護学実習 I を 1 週間の 1 単位 (45 時間) を行なった。

基礎看護学実習 II は、2 年次前期終了後の 9 月に 2 週間の 2 単位 (90 時間) を実施した。基礎看護学実習 II の目的は、学生が一人の対象を受け持ち、対象を総合に理解し、よりよい健康状態に向け日常生活を整えるための看護援助の方法を学ぶとともに、学内で学んだ看護技術を対象者の個別性をとらえ計画し実践し看護を学んでいき、看護者に必要な倫理的態度を養うことである。

学生は、1 年次に基礎看護学を学び、2 年次前期に看護過程、看護理論、生活援助技術、看護倫理学、生活習慣と健康 I の科目を履修しており、専門科目の学習途中の段階である。そのような状況のなかで、基礎看護学実習 II の目標がどの程度達成されたかを、学生の自己評価から明らかにするために調査を行った。その結果、今後の教育に対する示唆を得ることができたので報告する。

II. 目的

基礎看護学実習 II の目標に対する学生の自己評価から、今後の教育に対する示唆を得ることを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象：基礎看護学実習 II を終了した看護大学生 2 年次生 70 名。
2. 調査期間：平成 20 年 9 月中旬。
3. 用語の定義：基礎看護学実習 II とは、対象を総合的に理解し、よりよい健康状態に向け日常生活を整えるための看護援助を行い、看護者に必要な倫理的態度を養うことを目標とした実習。
4. 調査方法：基礎看護学実習 II の実習目標の下位目標 41 項目を使用し、「非常にそう思う」4 点、「そう思う」3 点、「あまりそう思わない」2 点、「全くそう思わない」1 点の 4 段階評点法とした。
5. 分析方法：下位目標項目ごとに平均点と割合を算出した。下位目標の平均点から中位目標 13 項目の平均点を算出した。さらに上位目標の 6 項目の平均点を算出し、項目ごとの平均点を比較検討した。
6. 倫理的配慮：対象者の口頭で研究目的を説明し、調査用紙は無記名で記入することとし、個人が特定できないようにした。調査への協力は自由意思であり辞退・中断する

ことで不利益を被らないこと，実習評価には影響しないこと，研究結果の公表をすること，研究目的以外にはデータを利用しないことを伝えアンケート用紙の提出は，教室に設けた回収箱に入れることとし，研究の同意は学生の自由意思により決定した。

IV. 結果

アンケートの回収率は，70名中67名で95%であった。41項目の平均得点は，3.19で(SD1.76)あった(表1)。

上位目標6項目の得点は，「対象を総合的に理解できる」3.10，「対象の日常生活における必要な援助を理解できる」3.17，「対象に必要な日常生活援助を立案し，計画的に実施できる」3.28，「実施した日常生活援助に対し適切な報告ができる」2.68，「対象に実施した日常生活援助の評価ができる」3.14，「看護者として必要な態度がとれる」3.34であった(図1)。

中位目標で得点の高かった項目は，「立案した計画に従って指導のもと，対象の反応を確かめながら実施することができる」3.58，「対象のプライバシーが保持できる」3.53であった。中位目標13項目で得点の低かった項目は，「対象がどのような日常生活を余議なくされているか，今までの生活習慣と関連づけて把握することができる」2.82，「対象を身体的・心理的・社会的側面をもつ統合体として理解し，全体像を把握することができる」2.97，「対象に必要な日常生活を具体的に立案することができる」2.99であった(表1)。

下位目標で得点の低かった項目は，「対象の主な疾患の病態生理が言える」2.93，「入院してから受け持つまでに，症状はどのように変化しているか言える」2.85，「対象の入院前と入院後の日常生活情報が収集できる」2.89，「対象の発達段階の特徴が言える」2.68，「入院前と入院後の日常生活行動の情報を収集・整理することができる」2.87，「日常生活援助を行っているときの対象の反応が言える」2.86，「呼吸－循環－体温調整，栄養－代謝，排泄－，活動－休息，防衛，性－生殖，感覚－知覚－伝達，自己像－自己実現，健康認識－健康管理，役割－関係の視点から情報収集できる」2.71，「対象を身体的・精神的・社会的側面をもつ統合体としてみることができる」2.77，「具体的で実践可能な計画を立案できる」2.86，「対象に実施した内容を，正確に要点をまとめて報告できる」2.68，「自分の疑問を表現できる」2.77の11項目であった。

下位目標で得点の高かった項目は，「対象に行われている治療が言える」3.46，「対象に行われている日常生活援助が言える」3.40，「対象と言語的・非言語的コミュニケーションをはかることができる」3.64，「実施する目的・手順について対象に説明し，同意を得ることができる」3.43，「遅刻・欠席がない」3.53，「報告・連絡・相談・確認ができる」3.41，「挨拶・返事ができる」3.62，「対象の話をよく聴くことができる」3.73，「臨地実習における情報の取り扱いが決められた通り厳守できる」3.53の9項目であった(表2)。

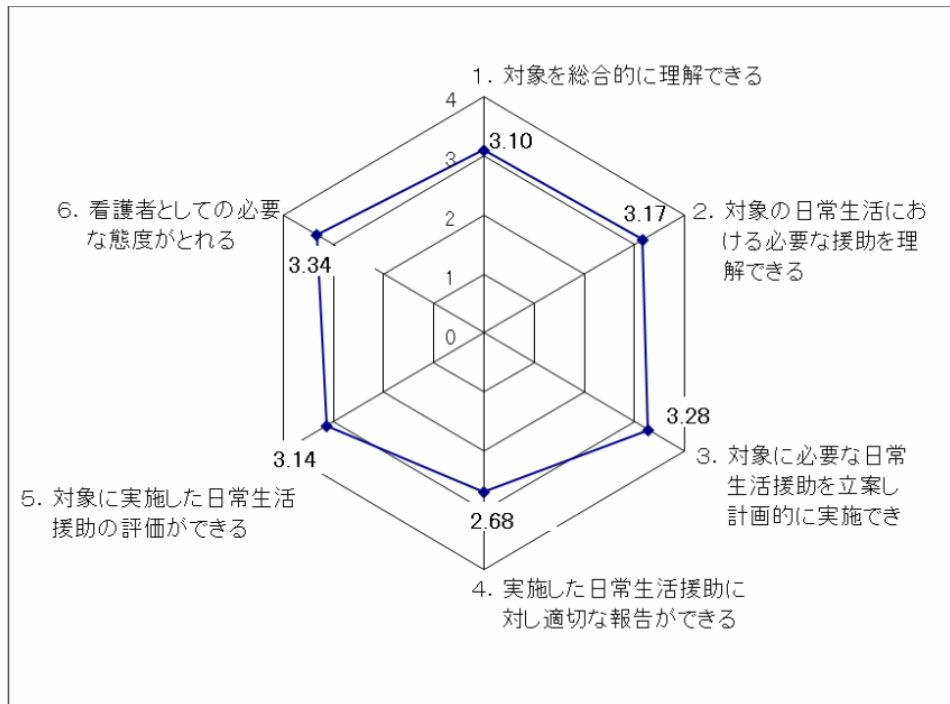


図1 基礎看護学実習Ⅱ上位目標 学生の自己評価

表1 学生の自己評価における中位項目の平均点

n=67

問	評価内容	平均点
1	対象のどこの機能が障害され、どのような健康段階にあるのか、経過とともに把握することができる。	3.36
2	対象が受けている治療や看護について把握することができる。	3.41
3	対象がどのような日常生活を余議なくされているか、今までの生活習慣と関連づけて把握することができる。	2.82
4	日常生活の変化をどのように受け止めているか、対象の反応を把握することができる。	3.23
5	対象を身体的・心理的・社会的側面をもつ統合体としてとらえ、全体像を把握することができる。	2.97
6	対象の健康状態をふまえた日常生活援助の必要性を説明することができる。	3.17
7	対象に必要な日常生活援助を具体的に立案することができる。	2.99
8	立案した計画に従って指導のもと、対象の反応を確かめながら実施することができる。	3.58
9	適切な時期に実施した内容の報告をすることができる。	2.68
10	対象に行った日常生活援助にどのような意味があるのかを振り返ることができる。	3.14
11	時間を管理し、礼節をわきまえた行動がとれる。	3.45
12	対象の尊厳や権利、プライバシーを守った行動がとれる。	3.53
13	主体的に学習し、疑問や問題解決のための行動がとれる。	3.03

表2 学生の自己評価における下位項目の平均点

n=67

問	評価内容	平均点
1	対象の主な疾患の病態生理が言える。	2.97
2	対象に出現している症状について情報収集できる。	3.19
3	入院までの病歴が情報収集できる。	3.25
4	入院してから受け持つまでに、症状はどのように変化しているか言える。	2.85
5	対象になぜ入院が必要であったか言える。	3.37
6	対象におこなわれている治療が言える。	3.46
7	対象におこなわれている日常生活援助が言える。	3.40
8	対象の入院前と入院後の日常生活情報について情報収集できる。	2.89
9	対象の発達段階の特徴が言える。	2.68
10	入院前と入院後の日常生活行動の情報を収集・整理することができる。	2.89
11	対象の言動に関心をもつことができる。	3.64
12	日常生活援助を行っているときの対象の反応が言える。	3.34
13	病気であることを認識した時に生じた対象の気持ちがわかる。	2.86
14	入院生活に対する患者の気持ちがわかる。	3.05
15	対象の訴えをよく聴き、正しく受けとめることができる。(主観的な情報)	3.34
16	対象を客観的に観察できる。	3.07
17	呼吸-循環-体温調整、栄養-代謝、排泄、活動-休息、防衛、性-生殖、感覚-知覚-伝達、自己像-自己実現、健康認識-健康管理、役割-関係の視点から情報収集でき	2.71
18	対象を10の生活行動様式をもつ身体的・精神的・社会的側面をもつ統合体としてみるこ	2.77
19	対象の健康障害を踏まえた日常生活援助が言える。	3.32
20	対象の健康状態を踏まえた日常生活援助の必要性の根拠が言える。	3.01
21	対象に望ましい日常生活援助方法を選択できる。	3.05
22	具体的で実践可能な計画を立案できる。	2.86
23	対象の状態に応じた日常生活援助に関わる留意事項を述べることができる。	3.01
24	対象の安全安楽を考慮した計画が立案できる。	3.02
25	実施する目的・手順について対象に説明し、同意を得ることができる。	3.44
26	対象の表情を観察し、声をかけながら実施できる。	3.28
27	安全・安楽・自立を考慮しながら実施できる。	3.25
28	対象のプライバシーの保持に留意することができる。	3.35
29	実施した内容を正確・系統的に要点を報告できる。	2.68
30	実施した方法は適切であったか振り返ることができる。	3.05
31	目標が達成できたか振り返ることができる。	3.22
32	遅刻・欠席がない	3.58
33	決められたことが、きちんとできる。	3.37
34	行動の前後には、必ず報告する。	3.41
35	挨拶・返事ができる。	3.62
36	対象の話をよく聴くことができる。	3.73
37	敬語・丁寧語を活用することができる。	3.23
38	対象のプライバシーに関する情報の扱いに配慮することができる。	3.53
39	指導・助言を受けた内容について追加・修正している。	3.26
40	自分の疑問を表現できる。	2.77
41	疑問を解決しようと文献等を活用している。	3.07

V. 考察

学生の基礎看護学実習Ⅱの自己評価は、平均得点は3.19でほぼ達成できたと評価しており、基礎看護学実習Ⅱの学習成果が高いことが考えられ、満足感が得られたと思われる。

1. 対象を総合的に理解できる

対象の言動に関心をもつことができると高く評価しており、総合的に理解できると評価している。臨地実習での受け持ち患者の選択は、学生にとって非常に重要であり、受け持ち患者との関係が学習効果を左右したり、緊張を高めたりする²⁾。初めての患者を受け持つということで、コミュニケーションがとれやすく症状が安定している対象を選択するようにしており、対象が学生を受け入れやすく、よい人間関係を築くことができたと考えられる。佐藤ら³⁾は「初期段階の実習で人間関係が「とれた」という思いを得られたことは、人間関係を築くうえで肯定的な感情をもつことにつながり、次の臨地実習への期待感や看護の学習への動機づけになる」と述べている。学生が、対象との人間関係がとれたという思いが持てるように、実習に対する肯定的な感情をもてるようにすることが大切であろう。

入院前からの情報収集や病態生理を理解することや対象の発達段階の理解が低い評価であった。基礎看護学実習Ⅱが、2年生の前期終了の直後ということで、専門的知識の学習途中の段階であり、学生自身が知識不足や学習不足を実感したためと考えられる。

学生は疾患の症状を踏まえた対象の身体的・精神的側面から併せた3側面からとらえることができにくい⁴⁾。さらに知識不足のために、情報に関連づけてとらえることができにくく、対象の日常生活にどのように影響しているかを理解するのが困難であったと考えられる。「実習は、学習の必要性を認識し、判断力と主体性を培う場であるため、自ら考え学んでこそ学習成果に結びつくことを実感し、主体性のある学習姿勢が身につくよう支援する」⁵⁾ことが大切である。学生は、対象理解やケアを実施するために学習の必要性を実感したと考えられる。解剖生理や病態などの基礎知識が深められるとともに、一つひとつの情報を関連づけて考えられるような学習への取り組みを支援することが必要であろう。

2. 対象の日常生活における必要な援助を理解できる

対象の日常生活における必要な援助を理解できるは、できると学生は評価している。初めて対象に援助を実践するためのとまどいやむずかしさを感じながらも多くの学生は、清拭や洗髪などの日常生活の援助を中心に体験することができ、学生はどのような援助がなされているかケアの参加や見学を通してとらえやすかったと考えられる。対象のどの機能が障害され、なぜその援助が必要なのか、どのように援助がされているのかをしっかりと理解できるように、援助場面ごとのふり返りを行い、援助の意味づけをすることが重要であると考えられる。

3. 対象に必要な日常生活援助を立案し、計画的に実施できる

対象に必要な日常生活援助を立案し、計画的に実施できると学生は評価しているが、下位目標の具体的で実践可能な計画を立案できるは、低く評価している。学生は、対象に必要な援助を理解し、援助を選択することはできるが、対象の個別性を理解した具体的な計画を立てることが難しいと考えられる。学内で学んだ一般的な知識や技術の原理・原則を、対象に対して適切に適応・実践していく⁶⁾ことが重要である。学生が対象の健康状態をしっかりとらえ、個別性をとらえた看護が考えられるように、丁寧で具体的に指導していくことが必要であろう。

4. 実施した日常生活援助に対し適切な報告ができる

実施した日常生活援助に対し適切な報告ができるは、低く評価している。学生は、対象に必要な援助を理解し、どのような援助を選択することはできる。対象の反応をとらえ、得られた情報を適切に報告することの難しさを学生自身が実感したと考えられる。

看護者として必要な基本的な責務として、報告・連絡・相談があり、学生自身の考えや思いを表現し伝えることは、相手の思いの確認になり、相互理解をすすめる⁷⁾ことになり、安全な援助を行うためにも重要である。忙しい臨床において、学生が援助を行う前後には、必ず報告ができるようにしていくことが大切である。

5. 対象に実施した日常生活援助の評価ができる

対象に実施した日常生活援助の評価ができるは、できたという評価している。援助できたかできなかったという感想で終わらないように、対象に行った看護がどのような意味があったのか、援助の方法や内容が適切であったか、技術が安全に正確にできたかを目標に沿って評価する必要がある。援助を行った後に、教員と学生がともに振り返りができるような場をつくる必要がある。

6. 看護者として必要な態度がとれる

看護者として必要な態度がとれるは、できたという評価であった。学生は、対象の話をよく聴き、言語的・非言語的コミュニケーションをはかると評価しており、対象と誠実に対応していたと考えられる。自分の疑問を表現できるは、低く評価していた。学生は、疑問に思うことを言わずに、わからないまま行動していることが考えられる。態度は知識や理解の教育によって形成させたりすることが可能である⁸⁾ように、看護者としての人間性を育ていけるように、教員自身も同じ看護者として、学生とともに態度を振り返る機会をもち、看護者としての倫理的感性を培っていくことが大切であろう。

VI. 結論

学生は、初めて患者を受け持ち、看護を実践するなかで、対象とのよい人間関係を築こうとしていたが、健康障害の理解不足や対象を総合的に理解することは難しいと認識していた。実施した日常生活援助に対し適切な報告をすることが難しいと感じており、報告することの重要性を認識したと考えられる。対象を総合的に理解できるように、病態生理やアセスメント能力を育むための教授方法を検討していくことが今後の課題であることが示唆された。

今回は、基礎看護学実習Ⅱの目標に対する学生の主観的な目標達成度のみの評価であった。学生の評価は、学生自身の実習目標が達成されたかどうかと、「教員が展開した看護学実習がどうであったか」という教員の教授活動の評価である。これらは、表裏一体の関係にあり、教員が質の高い実習指導を展開すれば、学生も高い学習成果を修める⁹⁾とある。実習目標が達成されたかどうかの評価と、実習での教員の教授活動が、どのようであったか評価を行っていくことが今後必要であろう。

文献

- 1) 森本美佐, 基礎看護学実習の実習方法変更における評価—看護過程の習得状況を分析して—, 奈良文化女子大学紀要, 2004.

- 2) 柳田美喜子, 学生に実りある臨地実習を提供するための指導者としての取り組み, ナースエデュケーション, vol. 4No. 3, 2003 ; p29.
- 3) 佐藤美紀, 大島弓子, 小松万喜子, 曾田陽子, 田代ひろみ, 水野美香, 門井貴子, 患者との人間関係形成の初期段階における学生の主観的評価とその理由 - 基礎看護学実習の体験を通して -, 愛知県立看護大学紀要第 12 巻, p21 ; 1997.
- 4) 同掲書 3), p17.
- 5) 同掲書 3), p20.
- 6) 松木光子監修, 宮地緑編著, 1999 : 看護学臨地実習ハンドブック基本的考え方とすすめ方改定 2 版, 金芳堂 ; p8.
- 7) 雨宮有子, 看護教育における臨地実習での「最も重大な体験」に関する学生の感情表現, 千葉県立衛生短期大学紀要第 25 巻第 1 号. 2006 ; p22.
- 8) 沼野一男, 教育技術ゼミ態度の評価, 看護教育, 12(11), 1971.
- 9) 杉森みど里, 舟島なをみ, 2004 : 看護学教育第 4 版, 医学書院 ; p281.